

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 2年次生 船橋 英奈

1. はじめに

2017年2月26日～3月10日までの期間、本学の国際交流基金の助成を受けて、オーストラリア薬学語学研修に参加しました。語学力の向上およびオーストラリアの薬学を学ぶことを目的として、ホームステイをしながら North Coast TAFE Kingscliff TAFE Campus において、薬学及び語学研修を行いましたので報告致します。



図1 参加者集合写真

2. 州立高等職業訓練専門学校 North Coast TAFE Kingscliff Campus



図2 授業風景

TAFEとは大学とは違い、理論ではなく実践的なことを身に付ける州立高等職業訓練専門学校です。薬学・調理・コンピュータ・理学療法士など、多岐にわたるコースが実施されています。実社会においてプロとして働いていくための実力を養うことができ、また多くの実社会で働いている方々が専門知識・実践力を強化するために、働きながらTAFEに通うことが多いことから、その実用性は非常に高度であるとオーストラリアで評価されています。私はTAFEで午前中にSpeaking・

Listening・Reading・Pronunciation、午後にオーストラリアの薬学事情・アボリジニー文化について学びました。午前の英語のクラスではリスニングやゲームなどをしながら、配付されたプリントを中心に u と a 等の類似音の発音の違い・日常英語などを学びました。午後のクラスでは、オーストラリアの薬学の仕組みを学んだ上で、実際に薬局に行き薬剤師さんやディスペンサリーアシスタントの人に薬局を案内してもらいました。



図3 薬局の陳列風景



図4 アボリジニー民族楽器

また、Finger という街に行きアボリジニーの人にアボリジニー文化について教えていただきました。アボリジニーの人は文字を書いて伝えるという文化はなく、ダンスや歌で伝統を伝えてきたそうです。昔は、木の実や葉っぱを薬や器、道具として使っていたそうです。実際に木の実を食べさせていただいたのですが、美味しいとは言えない味でした。しかし、ヤスリとして使っていた葉は鮫肌のようにザラザラしていました。

3. 日本とオーストラリア薬学の違い

一番大きな違いは、薬剤師の免許が大学以外に TAFE でも取れるということです。TAFE では知識というよりは技術を中心に学び、大学の方が専門的なことを習うそうです。学習期間は日本と少し異なり、4年間勉強した後1年間インターンシップをするため、計5年間です。また、オーストラリアの薬局には、薬剤師の他に Dispensary assistant と Pharmacy assistant がいます。その人たちが薬の用意やパッキングを行うため、薬剤師はチェックをするだけであまりすることがありません。ですので、一つの薬局にスタッフが大体8人ぐらいいるのですが、そのうち薬剤師はたった一人です。その代わり休みはほとんどないそうです。また、オーストラリアでは体に異変が起こった時、最初に薬局に行き相談するという点が日本とは異なっていました。オーストラリアでは肥満が問題になっており、ほとんどの薬局に血圧計があり、一人一人の記録を残し高血圧と判断したら病院に行くことを勧めるそうです。また、医師の処方箋があれば薬局でワクチンも打てます。その他には、薬が処方される時、日本みたいに何錠かごとではなく、ボトルごと処方されます。また希

望者には、飲む時の分ごとにパッキングしてくれるのですがその方法が日本とは少し異なっていました。(図5参照) 保険制度や薬の分類・保管・記録方法は日本と似ていました。



←図5 レジスターパッキング

4. その他

約2週間の日程の中で、土曜日と日曜日の2日間は学校が休みでした。土曜日にはホストファミリーがアボリジニーだったためアボリジニーの Traditional dance workshop に連れて行ってもらい、日曜日には CURRUMBIN WILDLIFE SANCTUARY PARK という動物園に大阪薬科大学から一緒にこの研修に参加した人達と行きました。アボリジニーはとてもコミュニティを大事にしているため、そのコミュニティには家族でなければ所属することは出来ません。今回は特別に家族として迎え入れてもらいました。この workshop は、毎週土曜日に、アボリジニーの子供たちが伝統的なダンスや歌を習うために開催されています。ダンスを見せてもらった後、教えていただき一緒に踊りました。観光旅行などでは決してできない、とても貴重な経験をする事ができました。



←図6 アボリジニーの集会風景

図7 ダンス練習風景→



5. 最後に

この 13 日間を通して、薬学知識の乏しさ・英語能力の乏しさを痛感しました。しかし、現地に行き生の英語に触れることにより得られた経験は、とても貴重でした。3日間ぐらい経つと耳が慣れ聞き取れるようになりました。言葉だけでなく表情やしぐさなどで、少しのことも伝える重要さを知ることができました。今回の経験を活かし、オーストラリアの薬学との違いを感じながら薬学をより一層勉強し、TOEIC などの英語の勉強もしていこうと思いました。また、自分の意見をはっきり持ち伝えることの大切さも知ることができ、これを機に意識しながら大学生活を送ろうと思いました。普段感じることのない折り紙などの素晴らしさも改めて感じ、薬学だけでなく日本文化についても紹介できるように勉強しようと思いました。このような貴重な経験ができたのは、国際交流基金のおかげです。また、この企画を計画してくださった先生方、近畿日本ツーリストのみなさん、TAFE のスタッフのみなさん、ホストファミリーなど、携わってくれた方々皆さんに心から感謝申し上げます。この貴重な経験を無駄にすることの無いよう、スキルの高い薬剤師を目指しより一層勉学に精進します。ありがとうございました。